

世界を知ろう ～みんな友だち～

呉市立
小坪小学校

新宅 良子

●担当教科●
全教科

実践教科：総合的な学習の時間 道徳・社会
対象学年：5・6年生 対象人数：5年15名 6年20名

実践の目的

- ・ネパールの文化や風習について知り、ネパールに関心を持つ。
- ・現地の写真からネパールと日本の共通点や相違点に気付くと同時に、現実の厳しさを知り、自分なりの考えを持つ。
- ・ネパールのような開発途上国が世界にはたくさんあること、それらの国々をお互いに支え合っている活動があることを知り、自分なりの考えを持ち生活を見直す。

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	ネパールってどんな国？ ① ネパールに関心を持つ (総合)	<ul style="list-style-type: none"> ・日本を外国の人に紹介するとしたら何を紹介するか発表する ・世界の国の中でどんな国のどんなことを知っているか発表する ・ネパールの国旗から国名を当てる ・ネパールの位置や国土について知る ・ネパールの様子を想像しメッセージカードを作る 	地図 メッセージカード
2 ・ 3	ネパールってどんな国？ ② ネパールの文化や風習を知る (総合)	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパール語での自己紹介を練習する ・グループごとに18枚の写真をネパールと日本に分ける ・カードの分け方と分けた理由を発表する ・ネパールの文化や風習について説明を聞く ・分けたカードを裏返し模様を完成させる ・エベレストと富士山と五重の塔の関係を知る 	地図 パワーポイント 写真 カード 衣装
4	ネパールの子ども達 ネパールの現実の厳しさを 知る (総合)	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールの子ども達のインタビューを聞く ・ネパールの子どもの生活と自分の生活を比較する ・3枚の写真から分かることを発表する ・ネパールの学校事情について知る 	DVD パワーポイント 写真
5	世界は今 開発途上国がかかえている 問題について考える (総合)	<ul style="list-style-type: none"> ・開発途上国のことについて知る ・もし学校に行けなかったらどうなるか想像する ・もし水道がなかったらどうなるか想像する ・少量の水で手を洗うことにチャレンジする ・自分の生活と比較する 	パワーポイント カップとバケツ 石けんと水

②・③ 限目 ネパールってどんな国？②

ネパールの文化や風習について知り、日本と比較して共通点や相違点を見つける時間とした。野菜・服・食事・乗り物・田畑・動物・祭り・寺・植物について、ネパールの写真と日本の写真を混ぜたものを18枚配った。どれとどれがセットになって、どちらがネパールでどちらが日本かを考えさせた。発表の際には、分けた理由も明らかにした。答え合わせの段階では、別の写真も見せて解説も加えた。服の話をする時は、女子にはクルタスクワールを着せ、男子にはトピをかぶせた。最後に、全部のカードを裏返して、できるものを見つけさせた。



ネパールの八百屋



日本の八百屋

日本の野菜と同じものがたくさんある。

壁に外国語が書いてある。

ネパールは野菜を山盛りにしているけど、日本は袋詰めしている。



ネパールの五重の塔



日本の五重の塔



2006年日本とネパールの国交関係樹立50周年記念に発行された記念切手

児童の反応

- ・日本から見てネパールはあり得ないことや、似ているところがたくさんあることが分かった。
- ・ネパールでは牛が自由というのがびっくりした。ちょっと怖いなと思った。
- ・ヒンドゥー教のことをもっと知りたい。他の国のことも知りたいと思った。
- ・ネパールはいい所だと思った。一回住んでみたいと思った。自分も行ってみてみたいと思った。
- ・ネパールの子と会って、話をしてみたい。

所感

ネパールと日本の生活を比べて、似ているところや違ってるところを、自分が思っている以上にたくさん見つけることができていた。子ども達は、考え方が柔軟なのだろうと思った。この柔軟な時期に、色々な経験や体験をさせて、色々な物の見方や考え方ができるようになってほしい。一方で、子ども達に投げかける言葉は、慎重でなければならないと改めて思った。この時間を通して、「ちがい」があるのは当たり前であること、「ちがい」は困ることではなく自分や他人

を認めるために大切なものであること、友だち同士でも「ちがい」があり認め合うことが大切であることを伝えた。



クルタスクワールとトピを身に付けて「ナマステ」



どちらがネパールでどちらが日本でしょうか？

1～4年生においても「ネパールってどんな国？」の授業をした。とても反応がよい。

4 眼目 ネパールの子ども達

事前に行ったアンケートの内容を思い出し、ネパールの子ども達にインタビューした様子のビデオを見た。ネパールのいいところは？好きな勉強は？将来の夢は？などの質問である。次に、ネパールの子ども達の学校の一週間の時間割と1日の生活時間を紹介し、自分の場合と比べさせた。さらに、山間にある学校・SEO（児童労働者のための学習センター）・レストランで働く子どもの3枚の写真からどんなことがわかるかグループごとに考えた。グループ発表の後、ネパールの教育事情についてと児童労働者についての話をした。



山間にある学校

- ・学校の人数は多いのに校舎はぼろくて小さい。
- ・背の高い人がいる。
- ・校舎がレンガでできている。
- ・体育館がない。



SEO
(児童労働者のための学習センター)

- ・机が一つずつじゃない。
- ・壁がレンガである。
- ・おしゃれをしている。
- ・ピアスをしている。



レストランで働く子ども

- ・大きな鉄板がある。
- ・給食みたいな器だ。
- ・いものような料理がある。
- ・柱に顔のようなかざりがある。

児童の反応

- ・朝食を作ったり手伝いをしたりして大変だと思った。また、授業時間は5分短いけれど、一日7時間もあるのでよくできるなあとと思った。
- ・生活面のほとんどが、日本と違っている。
- ・ネパールでは子どもなのに働かなくてはいけない人がいるのに、日本では大人が働いてくれている。日本は恵まれている国だと思った。
- ・子どもの内5人に1人が働いているなんて考えたこともなかった。知ることができたので、解決方法を考えたい。

所感

ネパールの子ども達も自分達と同じように、学校で授業をして好きな遊びがあり宿題もある。しかし、朝の時間の使い方や夜の時間の使い方などが大きく違っていた。このことに気付いた児童が多かった。そして、学校に行きたくても行けない友だちがいることを知り、なぜそうなるのか、みんながよりよくなるためにはどうしたらよいのかなどを考えるきっかけになったようである。学校に行けない子ども達のために何かできないかを考える、やさしい気持ちを表す感想が多かったことに安心した。今すぐに、具体的な行動に表さなくてもいいので、どうしたらよいか考え続けることと、自分の生活を見直すことをしてほしいと思った。

5 眼目 世界は今

ネパールの問題をきっかけにして、世界の問題に目を向ける時間とした。学校に通うことのできない子どもは世界中にどのくらいいるのか、学校に行けない子ども達が特に多いのは「開発途上国」で、「開発途上国」と呼ばれる国でくらしている人はどれくらいいるのか、などクイズ形式にして世界の問題に関心を持たせた。そして、学校に行けなく困ってしまうことは何か、水道がなかったらどうなるかを考えさせた。また、実際に少ない水で手を洗ってみることで、水は大切に使うものであることを実感させた。

Q1. 学校に通うことのできない子どもは世界中にどのくらいいるでしょう？

①7, 200万人

②1億3, 000万人

③2, 500万人

Q2. 開発途上国と呼ばれる国でくらしている人は、どれくらいいるでしょう？

①もし世界が100人だとしたらその4分の3の75人

②もし世界が100人だとしたらその半分の50人

Q3. 開発途上国の子ども達はどんなことに困っているの？

学校に行けない

5才までに死んでしまう

安全な水が使えない
水不足

3人に一人

Q4. 学校に行けなくどんなことに困ってしまうかな？

- ・文字の読み書きができない。
- ・計算ができない。
- ・必要な知識が得られない。
- ・はずかしい思いをすることも

Q5. 日本では1日に一人当たり約3百リットルの水を使っていますが、モロッコ東部のサハラ砂漠に面している多くの村では、1日に一人当たり何リットルの水を使っているでしょう？

- ・①約3百リットル
- ・②約130リットル
- ・③約13リットル

Q6. あなたの家に水道がなかったら？

児童の反応

- ・学校に行けない子どもが、世界中に7200万人いるということにびっくりした。
- ・日本では、ふつうに学校に行けて水も飲めるのに、開発途上国では、それができないのでがんばってほしいと思った。
- ・開発途上国は、世界の人口が100人だとしたら、75人もいることが分かったのでびっくりした。
- ・100mlくらいで手がきれいに洗えたことにびっくりした。今まで自分は、水をたくさん使っていたことに、バカだなと思った。

所感

学校に通えない子どもが7200万人とか100人中75人などの数値が、どれくらい子ども達に実感として受け入れられたかどうかはよくわからない。しかし、とても大きな数であることや、困った問題であることは分かったのではないかなと思う。もし自分の家に水道がなかったら、水がなくては困る・手が洗えない・調理できない・どこかへ取りに行かなくてはいけない、など水の必要性を確認できた。そして、苦労して手に入れた水を大切に試してみようということで、コップ一杯の水で石けんを使って手を洗った。100mlくらいで洗える事を、実際に目の前で見ることができた。2人の子どもしか実施できなかったのも、もっとたくさんの子どものことができるよう工夫すればよかったと思った。

6 限目 同じ空の下で

世界の国々は、言葉や文化など違うことが多いけれど、世界中の人々に共通した感性や思いがあることにあらためて気づかせた。そして、他の国の子ども達と自分の「同じ」を見つける。言葉や文化は違っても「同じ」心や思いをもっていることを共感的にとらえさせた。外国語活動の英語ノートの表紙にある写真と言葉「みんな友だち」を見て、なぜ外国語活動の表紙にあるのか考えさせた。

児童の反応

- ・この地球上にいる人達がみんな、ぼくらと同じ心を持っていて、そして同じように夢を持っていることが分かった。
- ・世界は同じ共通点がたくさんあると思った。挨拶の仕方はちがっても、挨拶をすることは同じ、みんな友だちということが分かった。
- ・世界中に困っている人がたくさんいるので、協力したいと思った。

所感

道徳「同じ空の下で」の学習は、外国の人々や異文化の中に、自分と共有される多くの感性や思いがあることをあらためて気づき、それを大切にしながら国際親善に努めようとする心情を育てることをねらいとしている。そして、外国語活動のねらいの一つに、外国語を通じて言語や文化について体験的に理解を深めることとある。つまり、外国語を通じて言語や文化についての体験的に理解を深めることは、日本人としての自覚を持って世界の人々との親善に努めることにつながっているのである。児童には、外国語活動は単に言葉を勉強しているのではなく、国際親善につながっていることを理解させたかった。実際に、社会見学で平和公園に行った時に、外国の人をみかけた児童が「Hello! My name is ○○. ~」など身に付けた英語を使って話しかけていた。



英語が使えるようになったからこそ話しかけることができたのである。総合と道徳と外国語活動に関連させることができ、それを児童に意識させることができてよかった。

7・8 限目 自分は今

前時までの学習で児童は、「他の国のことをもっと知りたい。」「働かなければならない子ども達のために何かできることはないのかな。」「自分はどんな大人になったらいいのかな。」「困っている友だちのために助けてあげることはないのかな。」「協力できることはあるのかな。」など前向きな思いをふくらませてきた。これらの思いを具体的な形にし、行動に結びつけていきたいと考えた。この時間は、「知る」ことよりも「考える」ことを中心にした。まず、テーマ「自分は何ができるか、何をしなければならないか。」をグループごとに考えて図に表した。次に、グループごとに発表し、考えを共有した。最後に、「ネパールで出会った日本の方」を紹介したり、国際支援活動の様々な形を紹介したりした。



児童の考えた「自分は何ができるか、何をしなければならないか」



青年海外協力隊員として活動されているHさん



NGO団体「シャプラニール」で活動されているKさん

児童の反応

- ・学校を休んで働かなければならない子ども達がいるので、他の国の人々が協力して募金などをして、そういう子ども達が少なくなって勉強をたくさんしてほしいと思った。自分は、大人になってそういう人達がいないようにしていきたい。
- ・できるだけ節水や節電をしていきたい。
- ・むだ使いをやめて、ユニセフ募金をしたい。募金をして困っている人を助けたい。

所感

児童は、何かしなければならないという思いは持っているものの、では何をしていけばいいのか具体的に分からないようであった。そこで、グループごとの話し合いを設定した。話し合いでは、みんなで考えたことは何故よいのか・それをすることでどういう効果が得られるのかななどを図で表した。節水をしよう・節電をしよう・食べ物を大切にしよう・募金をしようという考えが多かった。グループで話し合うことで、なかなか一人では考えが深まらない児童が多かったが、みんなで考えることにより考えが深まったようである。また他の発表を聞くことで、いろいろな考えの幅が広がったようである。さらに、児童には「もっと知ろう!」と様々な支援活動のことを紹介した。児童には、やり方は一つではないこと・みんなで知恵を出し合えば解決方法は見えてくること・行動することが大事であることを知ってほしかった。

9・10限目 呼びかけよう世界に（社会）

5年社会では、食糧問題について学習している。日本の食糧自給率や輸入・輸出についての学習もしている。それは、世界の食糧問題とも大きくかかわっている。児童は、食べ物を大切にす
る・食べ残しをしないと考えているが、なぜ国際支援につながるのかを知らせたいと思った。そ
こで、「世界の食料」の冊子を一緒に読み進めた。そして、「世界を知ろう」の学習の最後のま
とめとして『呼びかけ文』を書いた。

児童の反応

・食べ物を大切にしよう」の呼びかけ文

みなさん食べ物を大切にしていましょ。

今、開発途上国では食べ物を十分食べられない人がたくさんいます。それなのに、食べ物を残したら失礼だからです。資料によると、世界でうえに苦しんでいる人は8億5千万人いて、日本の人口の約7倍もの人です。そして、日本では60%は食料を輸入しているにも関わらず、その5分の1は捨ててしまっているそうです。だから、一人一人が食べ物を残したり捨てたりしないようにしなければなりません。

みなさん、バイキングでは自分の食べられる量だけ取って、少なかったら少しだけ取って取り過ぎないようにしましょ。そして、家では食べられる量だけついで残さないようにしましょ。後、買うだけじゃなくて、魚を釣って自分達で調理をした方がいいと思います。今度から、釣りなどもして、それを調理して食べるようにしましょ。

所感

食べ物を大切にしよう・学用品を送ろう・募金をしよう・節水しよう・節電しよう・ベルマークを集めよう・貧しい国の人達を助けよう、というテーマでそれぞれ呼びかけ文を書いた。すぐには実現の難しいものや、楽しい発想のものもあった。しかし、ここでは児童が真剣に考えることを大事にした。最後に、青年海外協力隊員の方からのメッセージ「何が必要か・何がみんなの幸せか・自分で考えること」を伝えた。将来、自分で考えて適切な判断をして行動できる大人になってほしいと思った

全体を通しての成果と課題

今回の国際理解教育の授業実践をするに当たって一番悩んだのは、何をどのように伝えるかであった。

事前研修や事後研修で考えてはいたものの、どの部分をどのように伝えるかは手探りの状態であった。

児童の反応を見ながら必要な情報や必要な内容を増やした結果、最後の「呼びかけよう世界に」を入れることにした。理由は、なぜ食べ物を大切にしなければならないのかをはっきり認識させたかったことと、社会での授業内容とかかわるところがあったからである。また、国語においても「ユニセフ募金に協力しよう」の呼びかけ文を書く学習をしていたので、今回の呼びかけ文に発展をさせることができた。

このように、総合としてだけでなく社会や国語そして6時限目の道徳のように、他の学習とかかわらせながら授業実践ができたことがよかったと思う。

また文化祭での劇において、配役にネパールの手品師を入れて、子どもがクルタ（民族衣装）を着て登場し「ナマステ」とあいさつをして劇をした。外国語活動では、色々な国の衣装を紹介

する学習でサリーやクルタを紹介したり、「レッドクルタ・・・・」などのように英語表現に取り入れたり、英語の3ヒントクイズの中にクルタやトピ（ネパール男性の帽子）を取り入れたりして、ネパールの文化に親しむ活動をした。このように、ネパールや外国のことに関心を持ち、親しみを持つことはできたように思う。

一方で、開発途上国の現状を知ることで、自分の生活を見直したり、自分が今できることやしなければならないことをしっかり考えさせたりしたかったのだが、表面的なことしかできなかったように思う。今後は、子ども達を書いた呼びかけ文の中からみんなで取り組むことを選び、目に見える形で実行をしていきたいと思う。今後もこれらの活動を通して、子ども達には「相手を尊敬すること」を身に付けていってほしいと思う。

参考資料

【書籍】

- ・地球の歩き方編集室（2007）「地球の歩き方ネパール2011~2012」ダイヤモンド・ビッグ社
- ・JICA地球ひろば「世界の食料」独立行政法人国際協力機構広尾センター
- ・JICA地球ひろば「地球の教室」独立行政法人国際協力機構
- ・JICA地球ひろば「学校に行きたい」独立行政法人国際協力機構
- ・「クロスワード」独立行政法人国際協力機構
- ・あたらしい道徳「同じ空の下で」東京書籍